



堀船中だより

北区教育ビジョン 2020 の人間村長の精神を基調とし、
心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標

自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒

《新年あけましておめでとうございます》

新年あけましておめでとうございます。昨年中は、地域・保護者の皆様には、コロナ禍の中、多大なるご理解とご支援をいただきありがとうございました。本年も、教職員一同力を合わせて、子どもたちのため、地域のために全力で頑張って参りますので、どうぞよろしく願います。



《平塚神社落ち葉清掃ボランティア みんな頑張りました》

12月24日(土)、平塚神社(JR上中里駅付近蟬坂上)の落ち葉清掃ボランティアを78名の生徒のみなさんが行ってきました。生徒会の自治活動として、生徒会役員が地域ボランティアの呼びかけをしてくれました。それに応えて多くの生徒のみなさんが快く参加してくれることになり、大変ありがたく思います。地域のために貢献しようとするその心意気が、本当に立派だと改めて感じました。



《2年生 ECで岩井学園に行ってきました》

2年生は、12月7日(水)～9日(金)まで、EC(イングリッシュ・キャンプ)のため2泊3日で岩井学園に行ってきました。神谷中学校と連合で実施しました。豊かな自然環境の中、外国の方々と共に生活体験や自然体験を重ねることで、実践的コミュニケーションを楽しみながら異文化理解を深めることができました。2年生のみなさんはマナーも大変よく、時間を守り集団行動をしっかりと行うことができました。何事にも積極的に取り組んでいて、とても感心しました。



《3組 校外学習 川越に行ってきました》

12月16日(金)、3組は校外学習で川越に行ってきました。喜多院～川越本丸御殿～川越市立博物館～氷川神社～時の鐘～昼食～川越まつり会館～菓子屋横丁等を見学してきました。事前学習の知識を確かめるべく、見学の時はみんな真剣でした。マナーがとてもよく、晴天にも恵まれて、良い思い出ができました。



《ボランティア部のみなさんが堀船南保育園を訪れて、手作りのクリスマスプレゼントを園児のみなさんにお渡ししました》

12月22日(木)放課後、ボランティア部のみなさんが、顧問の清水先生と堀船南保育園を訪れて、部員みんなで手作りしたクリスマスプレゼントを園児のみなさんにお渡ししました。園児達は嬉しさあふれる笑顔で、ボランティア部員のみなさんをお迎えしてくれました。プレゼントをお渡しすると、とっても喜んでくれました。そして園児のみなさんからは歌のプレゼントがありました。みんな可愛らしい笑顔で、一生懸命歌ってくれました。心温まる時間を、ありがとうございました。ボランティア部のみなさん、これからもずっと、堀船南保育園の園児のみなさんとの素敵な交流を頑張ってください。



《表彰 各種表彰おめでとうございます》

- ◎北区保健優良生徒
3年生 種村さん、3年生 刈屋さん
- ◎北区バスケットボール ジュニアカップ大会
【優秀選手賞】1年生 佐藤(哉)さん、1年生 堀江(愛)さん
- ◎第65回東京都児童生徒発明くふう展
【入選】2年生 重永さん、2年生 境さん(12月7日(水)～11日(日)に港区みなと科学館に展示されました)

北里柴三郎に学んだ優れた研究者（2）～赤痢菌を発見した志賀潔～

北里が育てた門下生の中で最初に世界的な業績を挙げたのは、志賀潔でした。志賀は、1871(明治3)年に旧仙台藩の藩医・佐藤家に生まれました。母方の志賀家も代々藩医を勤めていた家系で、1883(明治16)年、志賀家の跡取り養子になります。学資を出してもらい、志賀は第一高等学校から帝国大学医科大学(現・東京大学医学部)へ進みました。1894(明治27)年11月、本郷の帝国大学図書館で、香港から凱旋帰国を果たした北里と青山の歓迎会が開かれます。志賀はこの時の北里の凱旋講演を聞いて強く心を打たれ、北里を生涯の師として定めたのでした。それから二年後の1896(明治29)年、志賀は帝国大学医科大学を卒業するとすぐに北里が所長をつとめる伝染病研究所の門を叩き、入所を許されます。大学では解剖室で教授が死体解剖をするのを遠くから見学しただけで、伝染病研究所に入所するまでメスを握ったことは一度もありませんでした。入所して最初の数ヶ月は、細菌を純粋培養するための培養基を作る方法や、細菌を染色する方法など、基礎的な実験方法を北里から徹底的に指導されました。作業に少しでもミスがあれば何度でもやり直しを命ぜられ、実験データを加工した形跡がわずかにでもあれば大声で呼び出され、厳しく叱責されました。そんな伝染病研究所での研修期間を終えた志賀が、北里から最初に与えられた研究テーマは「赤痢」でした。志賀はすぐに下宿を引き払うと、愛宕町の研究所の一隅に蒲団を持ち込んで寝泊まりしました。赤痢の研究をやり遂げるまで研究所に籠城するつもりで昼夜を問わず研究に取り組んだのです。1897(明治30)年6月に赤痢病の研究に着手してからわずか6ヶ月後の12月には、志賀は赤痢の病原体を世界で初めて特定することに成功しました。この驚異的な速度での成功は、研究にかかる志賀の熱意と北里の適切な指導によるものなのはもちろんですが、背景には、実は志賀が赤痢の研究に着手するのと機を同じくして、人口が集中する東京を中心に全国で赤痢が大流行したことがありました。

明治の初め頃まで、赤痢は、熊本や愛媛に局在する風土病に過ぎませんでした。しかし、都市化による人口の集中に伴って、赤痢は次第に勢力を拡大し、明治20年頃には大阪に到達。やがて東京でも猛威を振るうことになりました。志賀はそうした状況の下で、患者の一人一人について染色や顕微鏡検査等をしらみつぶしに行いました。そして、ついに志賀は、大腸菌とは異なるチフス菌に似た細長い棒状の細菌を認めました。世界で初めての赤痢菌発見の瞬間でした。

1897(明治30)年12月、志賀は北里の指示に従って論文を発表します。その論文の冒頭には、赤痢菌を発見した1897(明治30)年の日本全国患者数が89,400余名、死者23,000余名と記載がありました。伝染病研究所附属病院でも34名の赤痢患者を収容し、うち8名が死亡しました。論文に発表した赤痢菌は、北里の指導により、志賀が伝染病研究所附属病院の34名の患者の排泄物から発見したものでした。論文では、赤痢が大流行する中で命がけの研究が行われたことが詳細に述べられています。北里は弟子に対して厳しい指導を行いましたが、その代わり、何らの制限をも与えないよう心がけており、弟子が能力を伸ばすため、自由で整備された研究環境をつくることに努めていました。その教育方針と研究環境が、多くの優れた研究者を輩出することに役立ったのは間違いありません。のちに志賀は、回想録において「私の最初の赤痢研究は北里先生の懇切丁寧な指導のもとに成されたものである。私は大学を出たばかりの若僧だったから、先生の共同研究者というよりむしろ研究助手というのが本当でした」と当時を振り返っています。この頃の研究論文は、研究助手を指導する研究主任の名で発表されるか、連名で発表されるのが普通でした。しかし北里は弟子の功績を尊重し、赤痢菌の発見の論文は、志賀の単独名で発表するよう指示したのです。赤痢菌の学名は、発見者の志賀の名にちなんで *Shigella dysenteriae*(シゲラ ディゼンテリエ)とすることが定められました。こうして志賀は、細菌の学名に名を残す唯一の日本人となったのです。

赤痢菌の発見後、志賀は1901(明治34)年にドイツ・フランクフルトの実験治療研究所に留学し、当時の細菌学の最高権威だったパウル・エールリッヒの指導を受けました。志賀は、エールリッヒの行っていた化学物質を使って治療する「化学療法」のプロジェクトに参加すると、1904(明治37)年に世界初の化学療法にも携わっています。化学療法というのは、化学の力で作られた毒性により、病原菌などを殺す治療法のことです。現在では、がん治療での化学療法が有名です。

尊敬する師・北里によって世界に送り出された志賀は、世界の医学界に今なお消えない足跡を残したのです。



志賀 潔 博士
【提供】学校法人北里研究所
北里柴三郎記念室